CAMPUS NOW

早稲田大学広報

No.262
2026/10

特集

大学×スポーツ、広がる地平。



巻頭インタビュー
株式会社今治.夢スポーツ 代表取締役会長
元サッカー日本代表監督
岡田武史

SPECIAL
INTERVIEW

写真提供＝共同通信社／
株式会社今治．夢スポーツ

TAKESHI OKADA

岡田武史さん

分断を越えるスポーツの力が、未来を拓く

過去2回のFIFAワールドカップで日本代表監督を務め、現在は愛媛県今治市を拠点に活動する岡田武史さん。日本サッカーの黎明期に、高校時代からユース日本代表で活躍。1年間の浪人生活を経て、1976年に早稲田大学政治経済学部に入学した。

「同好会に所属して大学生活を楽しんでいた1年生の夏、日本サッカー協会の方々にア式蹴球部への入部を促されました。加藤久さんや西野朗さんなど、日本代表クラスの選手が所属していたのが、当時のア式蹴球部。寮生活や上下関係が苦手だった私ですが、『逃げたら、弱虫だと思われる』と練習に打ち込みました」



在学中の岡田さんに大きな影響を与えたのが、ア式蹴球部の堀江忠男監督だ。

「モスクワ五輪のボイコットに『スポーツが政治に左右されるのはおかしい』と感じ、ゼミの教官でもあった堀江先生に疑問をぶつけました。すると『お前はスポーツマンか、それともスポーツマシンか』と問われ、私は『スポーツマンのつもりです』と返答。『だったら一人の人間としてソ連の行為をどう思う。そこをよく考えて自分で判断しろ』と諭されたのを覚えています。『人類愛のために学問もサッカーもやっている』と仰った先生の生きざまを、ずっと目指してきました」

長年にわたりサッカー界に貢献してきた岡田さんは、2014年にFC今治のオーナーに就任。チームを四国の地域リーグからJ2に昇格させるとともに、建設と資金調達に奔走した「アシックス里山スタジアム」は、地域活性化の拠点にもなっている。さらに「FC今治高校 里山校（以下、里山校）」の学園長も務め、教育にも注力してきた。

「AIの発達により、社会は大きな変革を迫られています。核戦争や環境破壊を引き起こす人間は、やがてAIに管理されるかもしれません。予測不能な時代を生きるには、主体的で多様な視点が重要です。未来を拓く力を培えるよう、里山校では地域活動や野外活動など、実践を通じた学びを重視しています」

今治で岡田さんが目指すのは、「心の豊かさを大切にする社会創り」だ。

「GDPなどの数値で示せる豊かさに対し、信頼や共感、勇気、夢、仲間など、目に見えない豊かさも存在する。そうした無形資産に目を向けなければ、社会は必ず行き詰まります。地球の資源が有限であるのに対し、世界の人口は爆発的に増え続け、格差や分断が蔓延し、世界には絶望が漂い始めました。しかし地域の共助コミュニティーであれば新たな秩序を見出せるかもしれません。コミュニティーの目的を宗教や政治に置くと価値観の違いから対立も生じますが、スポーツであれば違いを乗り越えて人々をつなぐことができる。スポーツの価値を信じ、次世代のために力を尽くしていきます」

PROFILE

1956年大阪府生まれ。1980年に早稲田大学政治経済学部を卒業後、古河電気工業株式会社サッカー部に所属。選手を引退後、サッカー日本代表監督としてFIFAワールドカップフランス大会、南アフリカ大会で指揮。コンサドーレ札幌、横浜F・マリノスなどで監督を歴任し、現在は、FC今治を運営する株式会社今治．夢スポーツにて代表取締役会長、日本サッカー協会にて副会長を務める。



特集

大学×スポーツ、広がる地平。

早稲田大学は、長い歴史の中でスポーツ振興に取り組んできました。
今日、その力は競技の枠を超え、さまざまなシーンに広がっています。
スポーツは、学生の成長や社会の発展に、どのように寄与するのでしょうか。
本特集では、大学とスポーツの可能性を追っていきます。

早稲田スポーツの軌跡

大学スポーツの進化、在学生や卒業生の活躍を、写真と共に振り返ります。

写真提供＝共同通信社／早稲田大学歴史館／早稲田スポーツミュージアム／早稲田大学野球部



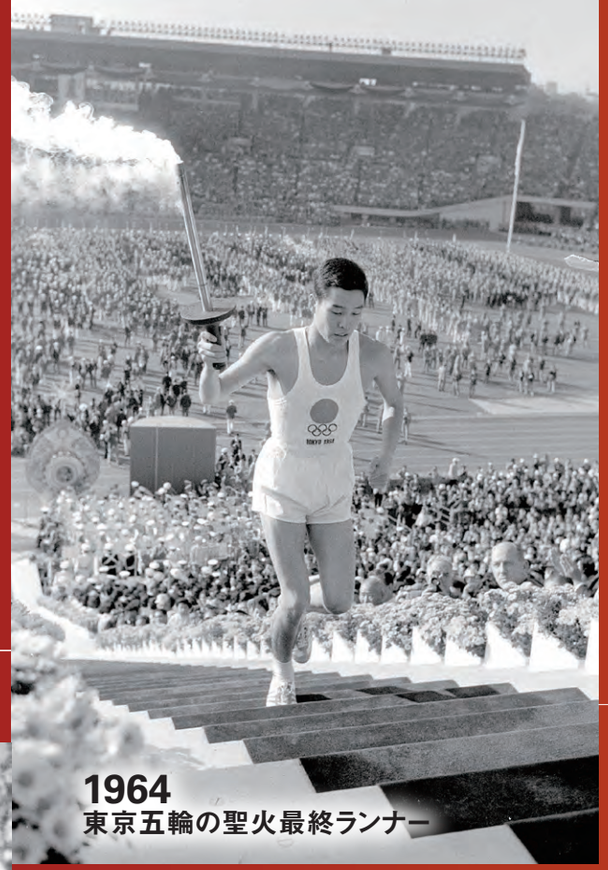
1901 野球部結成

教員の安部磯雄が初代部長を務め、野球部が誕生。翌年には撃剣、柔術、野球、庭球、端艇、弓術の6部が公認される。野球部は1905年、単独チームとして日本初の米国遠征を行い、先進的な野球技術を日本に持ち帰った。(写真：米国遠征時)



1928 日本人初のオリンピック金メダル

織田幹雄(当時商学部)が、アムステルダム五輪の三段跳びで、日本人初となるオリンピック金メダルを獲得。



1964 東京五輪の聖火最終ランナー

原子爆弾が投下された8月6日に広島県で生まれた坂井義則(当時教育学部)が、東京五輪で聖火リレーのアンカーを務める。



1987 人間科学部スポーツ科学科設置

新設の所沢キャンパス内にスポーツ科学科が開設。(写真：所沢キャンパス全景)



1998 サッカーW杯フランス大会

日本が初めて出場したW杯で、岡田武史(政治経済学部卒業)が監督を務めた。



2006 トリノ五輪

荒川静香(教育学部卒業)がフィギュアスケート女子で日本初の金メダル。



2007 全日本大学野球選手権

野球部が第56回全日本大学野球選手権大会で33年ぶりに優勝。(写真：斎藤佑樹[当時教育学部])



1936 友情のメダル

織田幹雄の指導を受けた西田修平(理工学部卒業)が、ベルリン五輪の棒高跳びで銀メダルを獲得。激闘を交わした慶應義塾大学の大江季雄とメダルを分け合った。





1943 “最後の早慶戦”

第二次世界大戦でスポーツ活動が中止される中、「学生野球の父」とも称される飛田穂洲(専門部法学科卒業)らの尽力により早慶戦が実現。



2008 ラグビー、2度の全国連覇

ラグビー蹴球部が第45回全国大学ラグビーフットボール選手権大会で、2007年度につづき優勝。同部は2004～05年度にも2連覇を果たしている。(写真：2008年度大会)



2011 大学駅伝3冠

競走部が箱根駅伝、出雲駅伝、全日本大学駅伝で史上3校目の大学駅伝3冠達成。(写真：中島賢士[当時スポーツ科学部])



2018
平昌五輪
羽生結弦（当時人間科学部通信教育課程）が、フィギュアスケート男子で66年ぶりとなる五輪2連覇を達成。

渡部暁斗（スポーツ科学部卒業）がスキーノルディック複合で3大会連続となるメダルを獲得。



2022
北京五輪



2019
全国大学ラグビーフットボール選手権
ラグビー蹴球部が第56回全国大学ラグビーフットボール選手権大会で11年ぶり16回目の優勝。



2021
東京五輪
須崎優衣（当時スポーツ科学部）がレスリング女子で、本学現役女子学生として初となる金メダルを獲得。

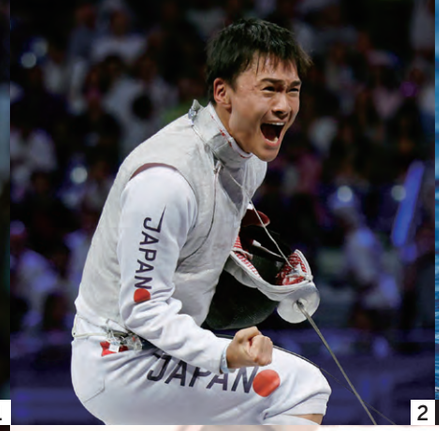
野球部が東京六大学野球春季リーグで49回目のリーグ優勝。 2024年シーズンの春秋の完全制覇に続き、3連覇を果たした。（写真：2025年春季リーグ）



2025 東京六大学野球、3度の栄冠











2024 パリ五輪
在学生・卒業生がオリンピックで6個、パラリンピックで4個のメダルを獲得。
（写真：1 加納虹輝［スポーツ科学部卒業］、2 松山恭助［スポーツ科学部卒業］、3 岡田奎樹［スポーツ科学部卒業／写真右］、4 池田海実［当時スポーツ科学部／韓国代表］、5 鈴木孝幸［教育学部卒業］）





2026 ミラノ・コルティナ五輪
在学生がオリンピックで1個、パラリンピックで2個のメダルを獲得。
（写真：1 村岡桃佳［当時大学院スポーツ科学研究科］、2 小野光希［当時スポーツ科学部］）

早稲田スポーツミュージアム
戸山キャンパスの「早稲田スポーツミュージアム」では、年表や資料、写真などを通して、早稲田スポーツの歴史と現在を紹介しています。入場無料で、どなたでもお越しいただけます。詳細はこちらからご覧ください。



学生座談会

挑む、支える、伝える。
大学スポーツの可能性

早稲田大学のスポーツ文化を構成する、44の体育各部や、サークル、学生団体。
その最前線で活動する学生5名が、大学スポーツの可能性を語り合いました。

写真提供=早稲田大学応援部／早稲田スポーツ新聞会



活動を通じて体感する大学スポーツの魅力

香西：私は野球部で主将を務めており、守備位置は投手です。小学生の時にテレビで見た早慶戦に憧れ、早稲田大学を志望しました。主戦場である東京六大学野球連盟のリーグ戦などに向けて、仲間と切磋琢磨しながら競技力を高めていくことに、やりがいを感じます。2026年春の早慶戦は、六大学野球では32年ぶりに行われた天覧試合でした。天皇陛下と愛子さまが観戦されている中、逆転サヨナラ勝ちを収めることができたことは、かけがえのない思い出となっています。

菊地：ホッケー部に所属しています。ホッケーは競技人口が比較的少なく、部では入学後に競技を始める学生も多いです。対する強豪校は、スポーツ推薦で入学した選手が多く手強いのですが、そこでいかに打ち勝つかを日々模索しています。

正木：二人のようなアスリートを、スタンドから支えるのが私たち応援部です。リーダー、吹奏楽団、チアリーダーズで構成される応援部は、44の体育各部の主要な試合に赴き、応援を行います。私は吹奏楽団のトランペットを担当し、第一応援歌『紺碧の空』など早稲田を代表する応援曲の数々を、誇りをもって演奏しています。

土橋：私が所属する公認サークルの「早稲田スポーツ新聞会」は、体育各部に取材を行い、新聞やホームページ、SNSで情報を発信しています。高校までは野球に打ち込んでいたのですが、怪我が原因で大学ではプレーヤーとしての活動を断念。それでもスポーツを支えたいと、早稲田スポーツ新聞会に入りました。

吉田：早稲田大学競技スポーツセンターの学生団体「VIVASEDA」で、スタッフを務めています。プロジェクトの軸は、大学スポーツの普及活動とオリンピック・パラリンピックに向けた活動です。体育各部の選手と一般学生が交流する「選手交流会」を企画するなど、誰もがスポーツを身近に感じてもらえるように努めています。

世代や国境を越えるスポーツ観戦の文化

土橋：大学スポーツの各試合の中でも、最も注目が集まるのが早慶戦です。野球やラグビーの大試合では、会場で配布する早稲田スポーツ新聞が2万部を超えることもあります。系属校の初等部、さらには幼稚園児から、高齢の卒業生まで、世代を超えて人が集まり、肩を組んで応援する。そんな文化は、人をつなぐと思います。

正木：コロナ禍の影響で観客数が減少した時期もありましたが、現在は元の水準に戻っています。応援部はより多くの方を呼び込むため、試合前の平日にキャンパスでのデモンストレーションやチケット販売の補佐を行っています。

吉田：VIVASEDAでは、スポーツに馴染みのない一般学生にも魅力を伝えられるよう、選手交流会や早慶戦をはじめとした試合の観戦ツアーを開催しています。部員が試合の見どころを、応援部が応援の方法をレクチャーするものもあります。留学生が参加することも増えてきました。彼らから見ると、吹奏楽団やチアリーディングをはじめ、日本の応援文化は特徴的に映るようで、「一体感を味わえるのが醍醐味」という声も聞きます。

正木：世代や国籍を超えて集まった大観衆の中で、応援をまとめ上げるのが私たちの力の見せどころです。応援席の一体感が生まれる時には、やりがいを感じます。

香西：投球する瞬間、マウンドにも熱気は届きます。見知らぬ人同士が肩を組み、勝利に涙する姿を見ると、努力をして良かったと感じます。学業だけではなく、スポーツを通じて「早稲田大学に入って良かった」と感じてもらうのが、

撮影＝東伏見キャンパス　ホッケー場







早慶戦のような大試合なのかもしれません。

菊地：マイナースポーツの競技者にとっても、観客の多い早慶戦は楽しみです。同時に、競技の魅力を多くの方に知ってもらう貴重な機会にもなっています。

土橋：マイナースポーツの魅力を伝えるのも、私たち記者の役目。本学でも、優秀な競技成績を収めたにもかかわらず広く認知されない競技もあるのが事実で、多くの人々に関心を持ってもらうのが課題です。メジャーな競技をきっかけに、大学スポーツに興味を抱いてもらい、他の競技にも足を運んでもらうのが理想ですね。

吉田：競技ルールなどの知識が乏しい学生もいますが、交流会で選手の人柄を知ることが、興味を持つきっかけになれば。また、サークルや学生団体は、何年生からでも活動できるので、ぜひ多くの学生に参加してもらいたいです。

香西：早稲田スポーツ新聞会やVIVASEDAのほかにも、「早慶戦支援会」など、体育各部は多くの団体に支えられています。課外活動を通じ、スポーツの輪が広がってほしいですね。

競技を超える
スポーツの多様な価値

菊地：体育各部の部員が日頃取り組んでいるのは、競技力の向上だけにとどまりません。行動規範である「早稲田アスリート宣言」に基づき、文武両道や社会貢献にも努めています。

香西：私は現在、スポーツ科学部での学びの集大成となる卒業論文を執筆中です。打撃速度と除脂肪体重の相関関係を調べており、部員の協力を得てデータを収集しています。学問と競技の好循環が生まれるのも、大学スポーツの価値の一つ。研究成果が自分や後輩たち、早稲田スポーツ全体の競技力向上につながればうれしいですし、将来指導者としてキャリアを歩み始めた際に、知見が役立つと期待しています。

正木：応援部は、試合以外にも大学関連イベントなどでパフォーマンスを行っています。地方のイベントでは、訪問を楽しみに待ち望んでくださる校友の皆さまや地域の方々に迎えられ、私たちの演奏を楽しんでくださる様子に喜びを感じます。

土橋：地域連携の話題では、多くの体育各部が参加する「早稲田スポーツフェスタ in 東伏見」も外せません。練習場が集まる東伏見キャンパスで年に1度、地域や応援者の皆さまへの感謝を込めて交流するイベントです。体育各部が子どもたちにスポーツ体験を提供するほか、早稲田スポーツ新聞会も写真展示を行っています。

正木：例えば、応援部は閉会式でのパフォーマンスのほか、チアリーディングの体験ブースを出展しています。他の体育各部は、子ども向けの用具を使って各競技の基本的な技術を指導するブースが多いです。スポーツの社会的な普及に貢献できることにも、意義を感じます。

土橋：また、私たちは毎年秋に開催される「早稲田文化芸術週間」で、早稲田キャンパス周辺の商店街と連携した展示も行っています。お店の方々も早稲田スポーツが好きで、快く引き受けてくれます。スポーツが、飲食店と学生のつながりや地域の活性化につながっていることは嬉しいです。

吉田：人のつながりは、オリンピック・パラリンピックでも感じます。VIVASEDAが運営を補佐した「パリ2024オリンピック・パラリンピック報告会」は、パリ2024五輪の出場選手を大学に招致するイベント。パラ競泳で金メダルを獲得した卒業生の鈴木孝幸選手の話を聞き、「もっとパラスポーツのことを知りたい」という感想を述べてくれた参加者もいました。









早慶戦

本学が慶應義塾大学と競う「早慶戦」は、競技の真剣勝負はもちろん、応援部を中心に一体となり盛り上がる応援合戦も大きな魅力。毎年、両校の観客が熱気あふれる観戦を楽しむ、伝統の対校戦となっている

早稲田スポーツフェスタ in 東伏見

毎年9月に東伏見キャンパスで開催され、4,000人超の方が来場する地域交流スポーツイベント。体育各部の学生が中心となり、スポーツ体験教室をはじめとした数多くの参加プログラムが用意される



パリ2024オリンピック・パラリンピック報告会

パリ2024五輪・パラリンピック代表選手6名が大会を振り返った報告会。フェンシング代表の加納虹輝選手、松山恭助選手、競泳の松本信歩選手、鈴木孝幸選手、卓球の岩渕幸洋選手、車いすバスケットボールの石川優衣選手がキャンパスを訪れた



撮影＝東伏見キャンパス　ホッケー場

菊地：ホッケー部女子部では、スポーツを通した長期療養児の自立支援活動に取り組んでいます。2026年7月には、長期療養を続けている小学生の女の子を1人、部員として迎えました。チームの一員として練習をしたり、一緒に食事をしたりしながら、チームメートとして時間を共有しています。

土橋:入部式の会見は、私たちも参加しました。取り組み自体を知らない子どもやアスリートも多いので、活動を伝えていくのも大切ですね。

菊地：もともと私は、部活動と並行して認定NPO法人「Being ALIVE Japan」の活動に参加し、スポーツを通じた長期療養児の自立支援という理念に共感しました。まずは学内で活動を広めようと、早稲田スポーツフェスタ in 東伏見で長期療養児向けの企画を実施。その後、早稲田大学競技スポーツセンターとBeing ALIVE Japanが事業提携に至り、ホッケー部として本格的にプロジェクトを始動しました。病気と闘っている子どもと接すると、自分が置かれている状況を見つめ直すことが多いです。日々練習に打ち込めている環境、周囲への感謝が芽生え、努力や向上心にもつながります。こうした関係性が、他の部、社会全体に広がっていってほしいです。

人や社会とのつながりが学生である自分を成長させる

吉田：VIVASEDAのイベントを企画・運営し、自分や参加者、協力してくれる体育各部、それぞれの希望を実現することに注力してきた中で、多角的な視点を養い、成長することができました。卒業後もスポーツに携わり、その魅力を広く伝えていく活動をしたいです。

土橋：取材をし記事をつくる活動では、さまざまな関係者と実際に会い、継続してつながりを持つ姿勢が求められます。体育各部や卒業生、大学職員の皆さんの力がなければ、サークルの活動は実現しません。社会の幅広い方々と接した経験を、卒業後も役立てていきたいです。

菊地：外部の団体であるNPOの活動を、学内に導入するために、部や大学職員の方々にビジョンを伝え、他者を巻き込みながら実現していくプロセスは、貴重な経験となりました。学業、スポーツ、社会貢献活動を両立するのは大変ですが、仲間との出会いや周囲のサポートに感謝しながら、かけがえのない時間を過ごすことができています。

正木：応援部の活動を通じ、集団をまとめる力が身につきました。人と関わり、準備を徹底し、本番に臨み、場を最大限盛り上げる。そのプロセスでは、相手の気持ちに踏み込み、理解を深めるコミュニケーションも必要です。そのため、私は部の信頼と伝統を損なうことのないよう、それにふさわしい人間で在りたいと心がけてきました。将来は金融機関に勤める予定です。金融機関も応援部も、他者のために力を尽くして成長を支える仕事。4年間で身につけた力を社会に役立てていきたいです。

香西：競技生活を通じて、たくさんの人に支えられて大学スポーツが成り立っていることを、実感してきました。応援してもらえる存在であり続けられるように、今まで努力を重ねられたのだと思います。スポーツを広め、活動を応援してくれる学生団体、つながりを持った幅広い皆さまと共に闘うのが、大学スポーツです。多くの方々と一丸となり、今後も盛り上げていきたいと思います。

交流&学びを育むスポーツ

競技や支援などの直接的な活動に限らず、スポーツの機会は全ての学生に開かれています。キャンパスの各所に広がる、交流や学びをご紹介します。

相撲を通じた異文化交流で文化理解を深めてもらう

交流する

ICCイベント

「一日、力士気分！ICC相撲体験」

私は「ICC（異文化交流センター）」の学生スタッフリーダー（SSL）として、国籍や出身地の異なる多様な学生の交流イベントを企画・運営しています。幼少期をカナダで過ごし、多様な価値観や新しい発見を魅力的に感じてきた経験から、今度は自分自身がそのような環境をつくりたいと思い、SSLに志願しました。

自ら企画したイベントの一つが、「一日、力士気分！ ICC相撲体験」です。言語に頼らない交流を促進するため、ICCが多様なスポーツイベントを実施する中で、私はスポーツとしての普遍的な魅力と、日本古来の文化的要素を併せ持つ相撲に着眼。スポーツを通じた交流に加え、日本の歴史や文化も学んでもらえるよう、イベントを企画しました。

イベント当日は、早稲田大学相撲部の協力のもと、歴史やルールの簡単なレクチャーを実施。その後は土俵に上がり、四股やすり足などの基礎稽古を体験してもらいました。希望者にはまわしを締めてもらうなど、普段なかなかできない要素を取り入れたところ、自然と写真撮影する場面も生まれました。中でも会場が歓声に包まれるほど盛り上がったのが、参加者と相撲部員の対決です。運動が得意かどうかに関わらず、全員が対決を希望するのを目の当たりにし、皆で挑戦を応援するスポーツの不思議な力を実感しました。

イベントを通じ、人と人との関係が構築されるプロセスを学びました。異文化理解を直接の目的とするのではなく、まずは交流を楽しむことで、結果として参加者は異文化に触れ、少しずつ理解を深められます。同じ時間と体験を共有することは、ICCに限らず多くのシーンにおいても、相互理解の近道になるはずです。

当日は多様なバックグラウンドを持つ学生が相撲を体験し、イベント後には相撲部特製のちゃんこ鍋も振る舞われた









白石大誠さん
文化構想学部4年

“スポーツ×社会貢献”でビジネスコンテストに挑戦

学ぶ

オープン科目

「スポーツを通じた社会貢献とビジネスの可能性」

全学共通のオープン科目「スポーツを通じた社会貢献とビジネスの可能性」を履修しました。この授業では、地域活性化や多文化共生など、さまざまな価値を生み出すスポーツにおいて、社会貢献とビジネスを両立させる方法を学びます。

特に印象に残ったのは、ゲストスピーカーの森下仁道さんによる講義です。モロッコのプロサッカーリーグにおいて初の日本人選手である森下さんは、現地の青少年に対してスポーツ参画と雇用の機会を創出するなど、社会課題に取り組んでいます。「現場を自ら観察し、持続可能な仕組みを構築する」アプローチ方法や、スポーツがもつ、人をつなぎ、信頼を生み出す力など、森下さんのお話から多くのことを学びました。







授業では、NPO法人の経営者やプロサッカー選手など、ゲストスピーカーによる講義を交えながら、学生同士で意見を交換する

一連の授業で身についたのは、スポーツによる社会貢献を「良い活動」で終わらせず、事業として設計していく力です。そのプロセスでは、社会課題を認識し、ステークホルダーを整理した上で、運営体制を構築し、成果につなげるフレームワークを用います。起業経験を持つ担当教員の岡田美優先生の指導により、アイデアの事業化を現実的な選択肢として捉えられるようになりました。

岡田先生の後押しを受け、履修生同士4人でチームを組み、学外のビジネスコンテストにもチャレンジしました。提案したアイデアは、日本人と在留外国人を対象に、スポーツを通じて交流と相互理解を生み出す多文化共生プログラム「PLAY JAPAN!」。地域の体育館や公園で「スポーツ×クイズ」のイベントを実施し、言語や国籍、年齢を超えた交流を促進した上で、生活ルールや防災、文化を学ぶ機会を継続的に設け、地域コミュニティーの形成につなげる事業構想です。この挑戦を通して身につけた、ビジネスの力で持続的に課題を解決する視点を、今後は実社会で生かしていきたいと思います。



チーム「PLAY JAPAN!」代表
白木碧空さん
政治経済学部4年

学ぶ

姿勢のメカニズムを健康的な学生生活に役立てる

オープン科目

「姿勢と健康」

学部の専攻科目での学びにとどまらず、専攻にかかわらず履修できるオープン科目で視野を広げたいと思い、「姿勢と健康」を履修しました。授業では、ストレッチや座学を通じて姿勢習慣の改善を図ります。受験勉強による肩こりや猫背に悩んでいた私に最適だと考えました。

授業の中で印象的だったのは、初回に行われた「猫背チェック」です。担当教員の碓田拓磨先生が、受講者一人ひとりの姿勢を確認し、類型を診断します。自分特有の癖を知り、類型を事前に把握することで、以降の授業で紹介された理論やストレッチを、パーソナライズされたメニューで実践できるようになり、姿勢改善の効果を高めることができました。

もともと姿勢を意識する機会が少なかった私は、履修を通じて考え方が変わり、良い姿勢がもたらす多くのメリットを実感するようになりました。「姿勢は人生を決める軸」と考え、授業で学んだことを日々実践するうちに、自信が湧いたり、倦怠感が減ったりと、健康的な効果も表れています。

運動の本格的な習慣化は難しい部分もありますが、スマートフォンやデジタルツールなくしては、勉強も娯楽も成り立たず、姿勢を崩しやすい現代、特別なものを必要とせず、毎日の生活の中でも取り入れやすい姿勢改善は、多くの学生が快適なキャンパスライフを送る助けになるはずです。オープン科目で身体の基礎知識を学ぶ機会が用意されていることは、学生全体の健康意識向上にもつながると感じました。

姿勢改善法「整座」の理論やストレッチ法を学び、パーソナライズされたメニューで実践する授業





山口咲佳さん
政治経済学部1年

早稲田スポーツの
さらなる飛躍を目指して

早稲田大学 競技スポーツセンターは、体育各部の活動支援と本学のスポーツ振興を目指し、さまざまな施策に取り組んでいます。石井昌幸所長が、大学におけるスポーツの存在意義を説明します。

※所属・肩書は2026年8月取材時のものです。



競技スポーツセンター所長
石井昌幸
（スポーツ科学学術院教授）

文武両道を実践する早稲田大学の体育各部

早稲田大学の創設者・大隈重信は、「知育・徳育・体育の三者は相並行して進まざるべからずは、今更の問題にあらず」と語り、学生のスポーツ活動を奨励していました。以来、アスリートや専門家の輩出と、競技力の科学的な分析を両輪として、スポーツと発展を共にしてきた本学は、今日も教育・研究・社会貢献の各方面で、スポーツと密接に関わっています。

早稲田スポーツの一翼を担う伝統ある組織が、体育各部です。44の競技にわたる各部では、約2,800名の学生が活動に励んでおり、大隈が説いた文武両道の精神を実践しています。競技スポーツセンターでは、体育各部の活動を支援すべく、さまざまな事業に取り組んでいます。

社会貢献や国際交流にスポーツの潜在力を応用する

まず、競技力の強化に向けては、チームを導く指導者の育成が欠かせません。監督とコーチを対象に、年に2回開催する『コーチサミット』では、外部講師を招き、チーム力強化、メンタル管理、けが予防や暑熱対策など、部活動を支えるために必要なテーマに基づく研修を実施。指導者としての知見の向上に努めています。近年は各部の財務支援にも力を入れており、グッズ販売やクラウドファンディングを実施するなど、早稲田スポーツのファンコミュニティーの力を生かした運営資金獲得も推進しています。

部員に対する教育では、「早稲田アスリートプログラム（WAP）」を実施しています。大きな柱の一つは「人格陶冶のための教育プログラム」です。本学の体育各部部員には、優れた競技成績を収めるだけでなく、文武両道を実践し、社会のさまざまな分野でリーダーとして活躍できる人材へと成長することが求められます。その基礎を身につけられるよう、教材やイベントを通じ、スキルや教養の習得、キャリア形成の支援を行っています。また、各部に対しては社会貢献活動を奨励しており、地域貢献や子どもたちへのスポーツ普及、障がい者スポーツの支援、被災地復興支援など、部の個性を生かした活動が育まれています。さらに、韓国・高麗大学との定期戦をはじめ、海外機関との交流も促進。国際的視野の獲得も強化しています。

一般学生にも波及するスポーツの教育的価値

部員の教育は、2007年に定めた「早稲田アスリート宣言」に基づいています。「人格の陶冶」「競技を支え応援してくださる方々への感謝」「社会との連携」などを明記した同宣言の理念は、活動の中での振り返りを通じ、部員たちが共有しています。体育各部が模範的組織であることは、体育各部以外の学生の人格形成にも良き影響を与えるでしょう。一般学生がアスリートの勇姿と出会い、交流が活発化するよう、競技スポーツセンターでは、早慶戦応援ツアーを企画運営する学生プロジェクト「VIVASEDA」の活動支援や、公認サークル「早稲田スポーツ新聞会」と連携した情報発信強化にも取り組んでいます。

早慶戦を観戦した学生より、「初めて早稲田の一員になった気がした」とコメントを受けたことは印象的でした。早稲田大学は多様性を重視する大学です。しかし、集う学生が多様だからこそ、共通のシンボルも大切になります。本学のシンボルの一つとして、不断の自己研鑽や他者との協調の先にあるスポーツは、ふさわしい存在であり続けるはずです。私たちは今後も、大学スポーツの振興を進めてまいります。

競技スポーツセンターや体育各部の活動は、こちらからご覧いただけます。

撮影＝戸山キャンパス 37号館　早稲田スポーツミュージアム

WASEDA Lab

研究者たちの挑戦

運動することが心身の健康につながることは広く知られています。一方、スポーツを「観る」ことは、人の心にどのような影響を与えるのでしょうか。スポーツ観戦とウェルビーイングの関係を研究する佐藤晋太郎教授に、スポーツ観戦がもたらす効果について聞きました。

心を動かし、人と人をつなぐ スポーツ観戦の力を探る



スポーツ科学学術院
教授
佐藤晋太郎

北海道教育大学教育学部卒業、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士課程修了。米フロリダ大学でPh.D.を取得した。米国・カナダの大学で教員や研究者を務め、2019年に早稲田大学へ着任。専門はスポーツ＆エンターテインメントマネジメント。

佐藤先生が出演している
早稲田大学Podcasts
「博士一歩前」

スポーツ観戦は「脳の筋トレ」。習慣化で「喜びを感じやすい脳」に

日本の「運動実施率」は長年横ばいで推移しており、週に1回以上運動をする20歳以上の人は約半分にとどまっています。健康のために「もっと運動しましょう」と働きかける研究も重要ですが、運動が苦手な人や忙しい人にとって、習慣化は容易ではありません。そこで私たちが着目したのが、誰でも手軽にアクセスできる「スポーツ観戦」と、近年注目を集める「ウェルビーイング」の掛け算です。

スポーツをすることとウェルビーイングの向上には、強い関連があることが分かっています。さらに近年は、スポーツを観ることにも、心の健康につながる可能性があることが脳科学の研究から見えてきました。

観戦中に好プレーを見ると、脳内の血流が活発になり、喜びや満足感に関わる報酬系の領域が反応します。これは筋肉のトレーニングと全く同じ仕組みです。素晴らしい体験によって脳に血流が送り込まれる経験を何度も繰り返すと、喜びを感じる脳の特定部位が発達し、結果として日常の中でも「楽しさや幸せをキャッチしやすい脳」へと変化していくのです。スポーツ観戦は、ネガティブに傾きがちな心を健やかに保つための、手軽で効果的な「脳の筋トレ」だと言えます。

同じ空間で観戦するだけで言葉を交わさなくても心拍は重なる

研究室では、アンケートによる主観的な調査に加え、脳波や心拍、表情筋、発汗などの生体反応を測定するアプローチを取り入れています。 社会科学の分野ではアンケート調査が一般的ですが、回答の手間がかかるため、回答者の意欲が低下し、信頼性の低いデータが混入する場合もあります。こうした限界を克服し、人間のありのままの反応を捉えるために、私たちは「生体反応」と「アンケート」を統合して多角的に人間を理解する「マルチモーダル分析」を推進しています。

言葉による回答と身体の変化の双方を見ると、観戦中の心の動きをより丁寧に読み取ることができます。

この方法を用いた研究で注目しているのが、観戦者同士の心拍が同調する現象です。2025年3月に埼玉スタジアムで行われたサッカーのワールドカップ予選では、観客に心拍計を着けてもらい、観戦中の反応を調べました。その結果、もともとの友人同士よりも、初対面の人同士のグループで、心拍の同調が強く見られました。同じ場所で一つのプレーに反応する体験には、言葉を交わさなくても人と人をつなぐ側面があることが分かったのです。この結果は、デジタル化やAIが急速に浸透する社会において、人々が同じ空間で体験を共有する意味を、改めて考えさせます。

自分の心が動くことに主体的に関わってほしい

スポーツに勝敗はつきものですが、今後は、勝負に負けた時にもたらされる価値、敗戦から学ぶラーニング効果などを科学的に解き明かしていく予定です。この分野はまだ研究が進んでいない、未開拓のフィールドのため、力を入れていきたいです。

また、スポーツを「応援すること」が人に与える影響についても、研究を深めたいと考えています。応援する人の心がどのように動き、それがウェルビーイングにどうつながるのかを明らかにしていきたいです。

命に関わるような医療や介護が「守りの福祉」だとすれば、スポーツのような「あってもなくてもいいけれど、あると人生が豊かになるもの」はいわば「攻めの福祉」の一つとも考えられます。多くの人々が、楽しみながらスポーツに関わることで幸福感を高め、健康な状態を維持できる。研究を通して、そういったサポートをしていきたいと思っています。

また、スポーツの世界では、選手だけでなく、コーチや栄養士など、多くの人がチームを支えています。観客や応援団も、スポーツを成り立たせる大切な存在です。 学生の皆さんにも、社会が示す一つの正解に自分を合わせるのではなく、他者を応援する気持ちを持ち、自分自身の心が動く場所や活動に関わってほしいと思います。その中で、自分なりの役割や充実感を見つけることができるのではないでしょうか。



1 水泳部
平泳ぎの2種目で2位に入った加藤



2 競走部
1年生ながら準優勝を果たした本田



3 アーチェリー部
三番手を務め連覇に貢献した五関



4 フェンシング部
連覇を成し遂げ笑みを見せる山崎



5 バレーボール部
フェイクセットを上げるアウトサイドヒッターの小野

W-Sports RESULT
「止まらない躍進」

写真提供=早稲田スポーツ新聞会

数々の輝かしい成績を誇る、
早稲田大学の体育会44部、
各部の活躍を紹介します。

1 水泳部
日本選手権水泳競技大会

6月4～7日
東京アクアティクスセンター
竹澤瑠珂が女子200メートル自由形で準優勝、加藤心冨が女子200メートル平泳ぎと女子50メートル平泳ぎで準優勝に輝いた。

2 競走部
日本選手権

6月12～14日
愛知・パロマ瑞穂スタジアム
本田桜二郎が男子1,500メートルで2着となった。

3 アーチェリー部
全日本学生女子王座決定戦

6月13・14日
静岡・つま恋リゾート彩の郷
創部初となる2連覇を達成した。

4 フェンシング部
全日本学生王座決定戦

6月14日
駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場
女子サーブルは優勝、女子フルーレは準優勝に輝いた。

5 バレーボール部
東日本大学選手権（男子山形大会）

6月24～28日
山形市総合スポーツセンター
決勝で中央大学を破り、3年ぶり5回目の優勝を果たした。

体育各部の戦績を紹介する
「W-Sports」を毎号掲載
早稲田学報

早稲田大学校友会が発行する卒業生向けコミュニケーション誌。年6回（毎奇数月15日）発行し、校友会費をご納入の方と定期購読をお申し込みの方のご自宅にお届けしています。『早稲田学報』は、さまざまな業界・分野で活躍する多彩な校友や校友会活動の紹介など、早稲田魂を揺さぶる話題が満載です。10月号の特集は「教授のノート」。研究の着想、記録、試行錯誤の跡など、公にされることの少ない教授の「思考の現場」を紹介します。



早稲田大学 校友会

校友会は、早稲田大学の第一回卒業生が出た翌年、1885（明治18）年に発足して以来、日本全国・世界各地に組織を広げて活動する同窓会組織です。校友の親睦を深め、母校・後輩を力強く支援するとともに、校友の人生を応援するサービスの充実に努めています。在学生・卒業生のご父母で、会費をご納入いただいた方は、父母会員としてサービスを利用することが可能です。
https://www.wasedaalumni.jp/

News & Trend

第18代総長に本間敬之教授が就任

新総長就任にあたり、本学の今後の方針をご紹介します。





（写真左）9月25日の記者会見にて。左より、若尾真治副総長、本間敬之総長、松本直樹副総長、古谷修一副総長

早稲田大学は2026年9月21日に開催した理事会において、本間敬之（理工学術院教授）を第18代総長に選定しました。任期は2026年9月21日から2030年6月頃までです。

本学では田中愛治前総長の任期満了に伴い、総長候補者選挙を実施し、6月に本間敬之教授が選出されました。その後、評議員会による理事選任を経て、理事会で総長候補者選挙の結果などを踏まえた審議を行い、新総長を選定しました。

2026年9月25日には、早稲田キャンパス大隈会館にて記者会見を実施。本間総長、松本直樹副総長（教育・総合科学学術院教授）、若尾真治副総長（理工学術院教授）、古谷修一副総長（法学学術院教授）が紹介されました。

本間総長は、「世界に貢献するWASEDAへ」と、早稲田大学が目指すべき方向性を明示。「さまざまな問題は、近年非常に複雑化している」と世界の現況を述べた上で、「個々の専門分野だけでは解決ができない状況であり、全学の力を結集し、学問領域の垣根を超えた融合と協働で、社会課題に対応すると共に、そうしたアプローチを実践する人材の育成が不可欠」と、次のステージに臨む姿勢を伝えました。また、「力を結集させる仕組みの構築」として、多様な知を統合し、研究・教育・社会実装の循環をつくる具体的な施策も共有されました。

プロフィール

本間敬之（ほんまたかゆき）／1964年東京都生まれ。1987年早稲田大学理工学部応用化学科卒業。1992年同大学院博士後期課程修了、博士（工学）。同大学理工学部助手、専任講師、助教授を経て、2005年より教授。早稲田大学教務部副部長、同部長、理事（教務担当）、常任理事（教学総括・副プロボスト）を歴任し、2026年9月21日より現職。国際電気化学会副会長、米国電気化学会・学会誌テクニカルエディター、文部科学省・中央教育審議会はじめ省庁等の審議会委員、評価委員等を多数務める。







卒業式の様子。（写真上：卒業証書を授与する田中愛治総長［当時］）

1,448名の門出を祝い 9月卒業式挙行

2026年9月19日、戸山キャンパスの早稲田アリーナにて、9月学部卒業式および大学院学位授与式を執り行いました。今年は学部卒業者802名、大学院修士課程修了者・専門職学位課程修了者550名、博士学位取得者96名の計1,448名が、新たな門出を迎えました。9月で任期を満了した田中愛治前総長は、「皆さんは早稲田大学で『たくましい知性』『しなやかな感性』『ひびき合う理性』を育んだことと思います。学んだことに自信をもって新しい道を切り拓いていってください。そして、卒業後も早稲田のことを忘れずに、早稲田とつながっていてください（一部抜粋）」とはなむけの言葉を送りました。





入学式の様子。（写真下：式辞を述べる本間新総長）

新たに1,127名を迎え 9月入学式挙行

9月26日には早稲田アリーナで9月入学式を挙行。学部492名、大学院635名、約75%を海外からの留学生が占める1,127名の新入生を迎えました。本間敬之新総長は、「早稲田には、とても多彩な環境が用意されていますが、これをどのように生かしていくかは、皆さん次第です。世界に貢献するために必要な知識、判断力、そして能力を身につけるのだという、強い目的意識を持って、学生生活を送ってほしいと思います。早稲田で過ごす時間は、長い人生の中ではわずかな時間ですが、自らの歩みを確かめ、次の行く手を見出す力となるでしょう（一部抜粋）」と式辞を述べました。

産学連携イベントWOI’26を開催

2026年11月11日（水）、早稲田大学の産学連携イベント「早稲田オープン・イノベーション・フォーラム2026（WOI’26：ダブリュー・オー・アイ）」を開催します。本学の研究推進の新しい仕組みであるGlobal Research Center（GRC）のもとで実施される、総合知による文理融合型の最先端研究や人材育成の成果などを紹介します。早稲田大学のトップ研究者と身近に交流できる機会となりますので、産学連携や共同研究をお考えの方や、最先端研究に関心ある皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

入場無料

参加申込などの詳細はWOI’26特設ウェブサイトをご確認ください



読者ウェブアンケート

皆さまのご意見を反映し、よりよい誌面にしていくためにアンケートにご協力ください。右記QRコードよりアンケートフォームへのご回答をお願いします。

表紙写真



東伏見キャンパス
サッカー場

約9万平方メートルの敷地が広がる、緑豊かな東伏見キャンパス。写真のサッカー場をはじめ、野球場やテニスコート、馬場、アリーナ、射撃場など各種のスポーツ施設を擁し、体育各部の活動拠点として、数々のアスリートを育んできた「早稲田スポーツの聖地」です。

NOW ON CAMPUS!



10月号の
気になるスポット



ゴールドポスト
@早稲田キャンパス

大隈講堂近くの広場に燦然と輝く金色のポスト。一体なぜこのような姿をしているのか、不思議に思いませんか。実はこのポスト、本学の女子学生として初の金メダルを獲得した、須﨑優衣選手（レスリング女子フリースタイル50kg級）の功績を記念して設置されたもの。東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催を記念した「ゴールドポストプロジェクト」により、金メダルを獲得した選手を称え全国79か所に設置された内の一つなのです。

※ゴールドポストプロジェクト：内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局が日本郵便株式会社と協力し、東京2020大会で金メダルを獲得した日本代表選手等にゆかりある地域の郵便ポストを金色に塗り替えたプロジェクト

WASEDA VISION 150

大隈重信が宣言した早稲田大学教旨を受け継ぎ、
本学は、創立150周年を迎える2032年の本学のあるべき姿を思い描き、
2012年に中長期計画“WASEDA VISION 150”を策定しました。
2018年以降、これをさらに進化させるべく新たなスローガンとして
「世界で輝くWASEDA」を掲げ、施策の検証と改善を繰り返しながら、不断の改革を実行しています。
詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
https://www.waseda.jp/inst/vision150/

WASEDA University
早稲田大学

CAMPUS NOW
【キャンパス ナウ】2026年10月20日発行　通号262号
※本誌記事・写真・図版を無断で転載等する事を禁じます。

発行　早稲田大学　広報室◎
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104
E-mail koho@list.waseda.jp

「CAMPUS NOW」読者ウェブアンケートにご協力ください。

制作協力　株式会社KWC
次号は、2027年1月30日発行を予定しています。